

第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を開催して

(2022年4月23・24日)

※かごしま県民交流センターとWeb配信のハイブリッド開催

島田 辰彦

島田ひふ科院長

はじめに

第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会は、2022年4月23・24日に鹿児島市のかごしま県民交流センターで開催しました。

オミクロン株の猛威で新型コロナウイルス感染者数が多いままでしたが、学会登録者数1,609人中690人がリアルな会場参加を選択してくださいました。

日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会(以下、大会)は、10ブロックが輪番に全国各地で開催しています。九州ブロックでは、第6回大会(1990年皆見紀久男会頭)、第17回大会(2001年西本勝太郎会頭)、第28回大会(2012年津田眞吾会頭)と3回開催しました。また、一昨年来のコロナ禍で開催形式の変更を余儀なくされ、第36回大会(2019年白濱茂穂会頭)、第37回大会(2020年早川道郎会頭)と同様に今回もハイブリッド形式での開催でした。

テーマ

私の座右の銘「日々是好日」ともつながるのですが、コロナ禍の大変な日々であっても、皮膚科医にとって皮膚科診療は楽しいものであることは変わらないと考え、今回のテーマは、「こんな時代だから楽しい皮膚科」としました。本当は、「だ」の後に「った」を挿入して過去形としたかったのですが、残念ながら現在形のままです。ロゴには、九州ブロック全県と桜島を入れ、大島紬の透かし柄をバックにしたポ



図1 大会ポスター

スターには「鹿児島といえば〇〇」と県外の人がいメージしやすい物を多数あしらいました(図1)。

プログラム

医学部の同級生の1人、今村健志先生(愛媛大学分子病態医学講座教授兼副学長)の特別講演「革新的バイオイメージング技術が拓く次世代皮膚科」で始まった大会は、日常診療の説明に即役立つだろうと思われる3つの特別講演、31のシンポジウム、2つのハンズオンセミナーと委員会企画に27の共催セミナーで構成しました。

シンポジウムの中には、団結は強いが個性も強い九州ブロックを全国に発信するために、各県支



図2 お土産として配布したロゴ入り焼酎グラス

部長がオーガナイザーとなり、それぞれの県の皮膚科診療の一端を紹介する九州ブロックセッションも企画しました。

今回も立食形式での懇親会の開催は見送りましたので、学会終了後の夕食で本格焼酎を楽しめることを想定し、文化講演で鯨島吉廣先生(鹿児島大学客員教授)に「薩摩の風土と焼酎」と題した本格焼酎のお話をしていただき、会場入り口でロゴ入りお湯割り用焼酎グラス(図2)の配布も行い、好評でした。

ポスター賞

前大会で試験運用されたポスター賞(公益財団法人マルホ・高木皮膚科振興財団協賛)は今大会から正式な賞となり、応募された65題の一般演題の中から、最優秀演題賞1演題、優秀演題賞3演題を選出し、学会から表彰状、財団から副賞(記念盾と賞金)を授与しました。

受賞された先生方*, おめでとうございます。本賞は次回以降も続きますので、若手の先生からの応募をお待ちしております。

オンデマンド配信

初の試みとして、学会終了後のオンデマンド配信を1カ月行いました。今回も6会場あるため、当日ブッキングして参加できなかったセミナーを聴講するのに有用なので、今後も行われるだろうと思います。

おわりに

学会会場やロビーで知り合いをみつけては「久しぶりだけど元気になっていた?」とか「この会からリアル参加を復活します」などと挨拶をして再会を喜び、会話を楽しんでおられる様子や、講演を終えた講師と会場外でディスカッションをしている姿をみると、やっぱり、リアル参加が学会の醍醐味なのだと実感しました。また、現地参加者から、一人の感染者も出すことなく無事に終了できて、大会役員一同、安堵しております(図3)。

ポスター賞受賞者*

最優秀演題賞:「東京2020オリンピック・パラリンピックにおける皮膚科の活躍」

津田 淳子先生(九段坂病院)

優秀演題賞:「SARS-CoV-2 ワクチン mRNA-1273 の投与後生じる遅発性大型局所反応の疫学調査」

東野 俊英先生(自衛隊中央病院)

「病変部の除圧に加え圧分散が有効であった糖尿病性潰瘍」

宮田 聡子先生(さいたま市民医療センター)

「亜鉛化デンプンで消退した肛門部巨大尖圭コンジローマの1例」

貝阿弥 瞳先生(大阪公立大学)



図3 大会役員一同